

短期海外ホームステイ・語学研修が及ぼす 英語能力¹⁾への影響

清瀬 健

1. 序

本稿は、前回報告²⁾の続報として、短期海外ホームステイ・語学研修が及ぼす英語能力への影響について実証的に調査・研究し、報告するものである。前回は、主に聴解力の変化について海外語学研修の効果を明らかにしようとした。その結果、短期間にもかかわらず、海外語学研修が被験者の聴解力に変化を及ぼすことが明らかになった。しかしながら前回の報告は、測定領域を「聴解」のみに限定していたため、他の領域への影響について調査がなされずにいた。今回は測定項目を「聴解」を含め、他の技能領域にも広げ調査・分析を試みた。

2. 目的

- ① 短期海外ホームステイ・語学研修後、被験者の英語能力にどのような影響がみられるかを調査する。
- ② 26日間のアメリカ滞在中、英語接触量³⁾の多少が英語能力にどの程度差異をもたらすかを調査する。
- ③ 研修後、測定項目領域間の相関にどのような変化がみられるかを調査する。

3. 調査

3-1 被験者

1990年度北星学園女子短期大学アメリカ語学研修に参加した63名の短大生。内訳は1年生60名、2年生3名。

3-2 研修及び研修地

1990年12月16日から26日間。ロスアンジェルス近郊の3つのコミュニティ (Yorba Linda, Whitter, Mission Viejo) でホームステイをしながら午前

中約3時間、週5日の授業。

3-3 テスト材料およびテストの実施

能力測定のためのテストはCELT (A Comprehensive English Language Test for Learners of English) Form A (McGraw-Hill) 及び、CELTの項目に含まれていない読解力を測定するために用意したクローズ形式のテストを使用した。CELTは測定項目が3つの部門から成り、(1)聴解 (Listening) -50問 (40分)、(2)構造 (Structure) -75問 (45分)、(3)語彙 (Vocabulary) -75問 (35分) で、いずれも4つの選択肢から1つの正解を選ぶ形式をとっている。読解テストは、たがいに関連のない2つのパラグラフをクローズテストにしたててある-50問 (30分)。空白はパラグラフ途中から7語おきに設けられ、空白を埋める為の語は、4つの選択肢から最も適切な1つを選ぶ形式になっている。選択肢が与えられたいわゆる「修正型クローズ」は、ポーター (Porter, 1976) らの報告にもみられるように、読解能力測定手段としての有効性が高いとされる。

テストの実施は、事前テストとして渡米前2週間の間に2回にわたって行なわれ、事後テストは帰国後2週間目に1回で行なった。

4. 結果と考察

4-1 全体の考察

表1は研修前後に行った能力テストの結果を基本統計量にまとめて表わしたものである。また、図1は研修前後のテスト結果のうち、各テスト項目の平均正答率が事前・事後でどの程度変化しているかを視覚的にとらえ易くす

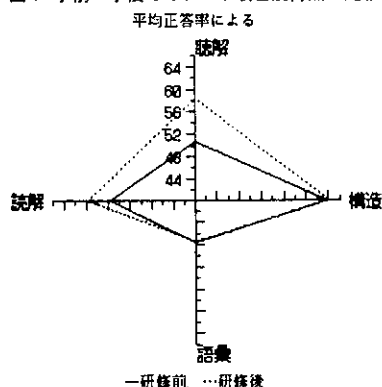
表1 語学研修前後の英語能力テスト結果

	聴 解		構 造		語 彙		読 解	
	前	後	前	後	前	後	前	後
テーク数	63	63	63	63	63	63	53	53
満 点	50	60	75	75	75	75	50	50
平 均 点	25.37	29.16	47.89	48.06	35.70	35.59	27.85	29.89
平均正答率	50.73	58.32	63.85	64.11	47.60	47.45	55.70	59.77
最 高 点	40	47	62	61	49	50	38	41
最 低 点	13	17	27	29	24	23	19	17
標準偏差	6.01	6.85	7.22	7.69	5.39	6.34	4.51	5.01
平均点の 差のt検定	7.790, $P<0.01$		0.255		0.1749		3.665, $P<0.01$	

るためにレーダーチャートで示したものである。

図1から明らかなように各項目のうち最も変化が大きかったのは「聴解」で、50.73から58.32と

図1 事前・事後でのテスト項目別得点の比較



7.59ポイントの伸びを示した。2 番目に変化が顕著であったのは「読解」で、55.70から59.77と4.07ポイントの伸びであった。「構造」及び「語彙」に関しては、それぞれ63.85から64.11と47.60から47.45とほぼ変化なしであった。

事前・事後テストの平均点の伸びに有意性があるかを検討するためにt検定を行なったところ、「聴解」、「読解」共に1%の水準で有意性が確認された。

最も伸びが顕著であった「聴解」については、①米国での授業が音声中心であったこと、②ホームスティ中にホストファミリーとのコミュニケーションを通して聴く訓練が家庭でもなされたこと、③ホームスティ中にテレビを見る機会が増えて聴く訓練がなされたこと等、渡米前の被験者全員の日常生活と比較して英語との接触量が飛躍的に増加した為、聴解力に大きな変化をもたらしたと考えられる。

一方、「読解」に関しては現地の授業や、ホームスティ中の家庭で特に訓練がなされなかったにもかかわらず有意な伸びを示した。これは、リーズ(Reeds, 1977)らの報告と同様に、集中的な「聴解」訓練が「読解」に転移したためと推測される。

「構造」と「語彙」の伸びに変化がなかった点については、この領域についての特別な訓練が授業や家庭でなされなかったことと合せて、「聴解」からの転移が起こりうると仮定しても、26日間という短期間では、有意な差にはなりにくいとも考えられる。

4-2 事前・事後での各領域の度数分布推移

図2～5はテスト領域ごとに、事前と事後では得点度数分布がどのように推移しているかを示したものである。図2の「聴解」の場合、分布が全体的に右に移動し平均点が上昇したことを示しているが、特徴的なことは事前テストの分布が51～60点の階級をピークにほぼ正規分布の形をなしていたが、

図2 「聴解」の度数分布多角形
(正答率による)

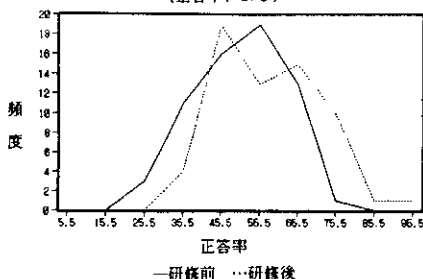


図3 「構造」の度数分布多角形
(正答率による)

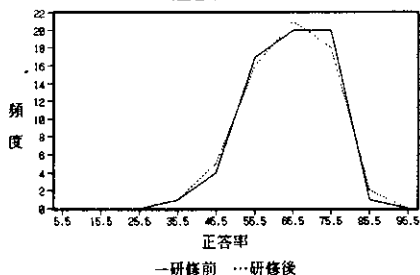
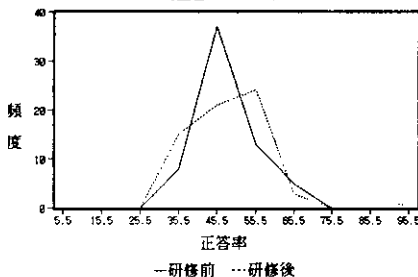


図4 「語彙」の度数分布多角形
(正答率による)



事後テストでは41～50点と61～70点の2つの階級にピークがみられる。つまり、研修の結果、得点階級が61～70点をピークに持つ聴解力が比較的高い上位グループと、41～50点をピークに持つ比較的低い下位のグループに2分されたことがわかる。

図3の「構造」の場合、事前・事後の分布に変化がほとんどみられない。しかしながら図4の「語彙」に関しては、事前・事後の平均点に変化がないにもかかわらず、分布のピークが事前の場合41～50点の階級で起っていたが、事後では51～60点へと変化している。と同時に事後テストでは、61～70点の階級の者が減少し、かつ31～40点の階級が増加している。この現象は、事前テストで未知の語彙をあて推量により正解した語彙が、事後テストの段階で依然未知であったため今度は正解でない別の選択肢を選んでしまった被験者がかなりいたことによるとと思われる。

図5の「読解」については、事前・事後で標準偏差に大きな変化がなく、事後で平均点が上昇したために事前の分布を右にほぼ平行移動したような形になっている。

図5 「読解」の度数分布多角形
(正答率による)

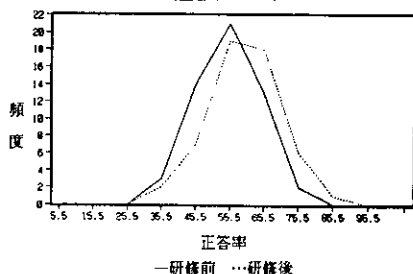


図6 一日の英語接触量別に分けられた
グループの内訳

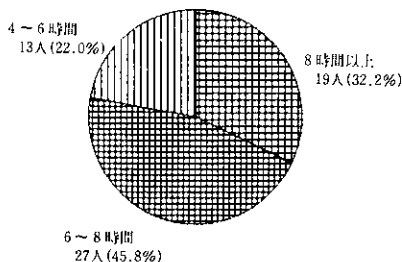
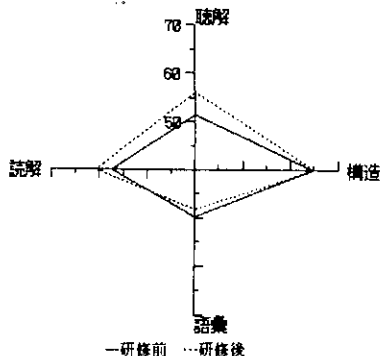


図7 一日の英語接触量が8時間以上と
答えたグループ



4-3 接触量による能力変化

帰国後、記名式アンケート*を実施した際、アメリカ滞在中英語との接触時間が1日平均何時間くらいかとの問いに、8時間以上と答えた被験者が19人(32.2%)、6~8時間が27人(45.8%)、4~6時間が13人(22.0%)で大きく3つのグループに分けられた(図6)。これら3グループ間に能力差があるかどうかを検証するため事前テストの各領域について分散分析を行なったところ、F値が「聴解」0.490、「構造」0.100、「語彙」1.112、「読解」0.599と4領域すべてにグループ間の有意差がなく3グループの等質性が確認された。

3グループの基本統計量は表2~4にあらわしてある。図7~9

図8 一日の英語接触量が6~8時間と
答えたグループ

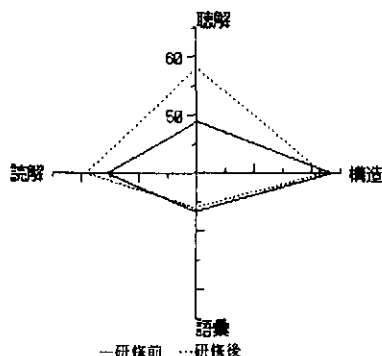
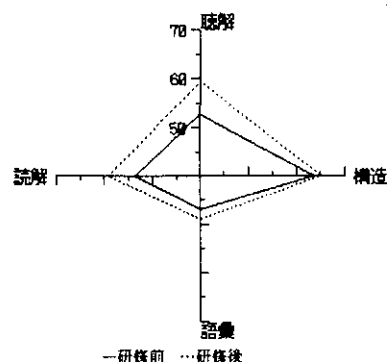


図9 一日の英語接触量が4～6時間と答えたグループ



は4領域の事前・事後テストの平均正答率をグループごとにレーダーチャートに示したものである。

表2 一日の英語接触量が8時間以上と答えたグループのテスト結果

	聴 解		構 造		語 彙		読 解	
	前	後	前	後	前	後	前	後
データ数	19	19	19	19	19	19	19	19
満 点	50	50	75	75	75	75	50	50
平均点	25.74	28.11	48.63	48.89	37.42	36.26	28.68	30.37
平均正答率	51.47	56.21	64.84	65.19	49.89	48.35	57.37	60.74
最 高 点	40	47	62	61	46	50	36	38
最 低 点	15	17	27	32	30	26	19	22
標準偏差	6.26	7.15	8.47	8.01	5.02	5.58	4.37	4.58
平均点の 差のt検定	2.516, $P<0.01$		0.270		-1.153		1.684	

表3 一日の英語接触量が6～8時間と答えたグループのテスト結果

	聴 解		構 造		語 彙		読 解	
	前	後	前	後	前	後	前	後
データ数	27	27	27	27	27	27	21	21
満 点	50	50	75	75	75	75	50	50
平均点	24.44	29.07	47.67	46.63	35.07	34.56	27.86	29.71
平均正答率	48.89	58.15	63.56	62.17	46.77	46.07	55.71	59.43
最 高 点	35	41	60	61	47	47	38	41
最 低 点	13	18	31	29	26	23	20	19
標準偏差	6.45	6.87	6.98	7.85	5.08	6.80	4.92	5.35
平均点の 差のt検定	6.462, $P<0.01$		-0.874		-0.489		2.076, $P<0.025$	

短期海外ホームスティ・語学研修が及ぼす英語能力への影響

表4 一日の英語接触量が4～6時間と答えたグループのテスト結果

	聴 解		構 造		語 彙		読 解	
	前	後	前	後	前	後	前	後
データ数	13	13	13	13	13	13	12	12
満 点	50	50	75	75	75	75	50	50
平均点	26.38	29.69	47.77	48.85	35.31	36.69	26.83	29.58
平均正答率	52.77	59.38	63.69	65.13	47.08	48.92	53.67	59.17
最 高 点	34	40	58	59	49	49	32	39
最 低 点	17	21	35	40	24	26	20	17
標準偏差	5.14	6.32	6.08	7.08	6.27	6.7	3.72	5.17
平均点の 差のt検定	3.613, $P<0.01$		0.522		0.962		2.368, $P<0.026$	

表5 英語接触量で分けられたグループ間の「聴解」での分散分析表（事後テスト）

要 因	平方和	自由度	不偏分散	F値
級 間	20.979	2	10.49	0.212
誤 差	2764.411	56	49.364	...
合 計	2785.39	58

表6 英語接触量で分けられたグループ間の「構造」での分散分析表（事後テスト）

要 因	平方和	自由度	不偏分散	F値
級 間	73.849	2	36.925	0.585
誤 差	3533.778	56	63.103	...
合 計	3607.627	58

表7 英語接触量で分けられたグループ間の「語彙」での分散分析表（事後テスト）

要 因	平方和	自由度	不偏分散	F値
級 間	53.287	2	26.643	0.616
誤 差	2421.12	56	43.234	...
合 計	2474.407	58

表8 英語接触量で分けられたグループ間の「読解」での分散分析表（事後テスト）

要 因	平方和	自由度	不偏分散	F値
級 間	6.069	2	3.034	0.113
誤 差	1319.623	49	26.931	...
合 計	1325.692	51

研修後、接触量で分けられたグループ間で事後テストの得点に有意差が認められるかを検証するために事前テストと同様、分散分析を行なった。（表5～8）。

各表のF値が示すように「聴解」、「構造」、「語彙」、「読解」のいずれの領域にも有意差が認められなかった。すなわち、接触量が増大したために被験者全体の「聴解」、「読解」能力が高まっていながら、接触量別に調べてみると有意差が認められない訳で、一見矛盾したデータのようにもとれる。この要因として、①被験者の自己申告による接触時間量が、かならずしも正確でなかった可能性が上げられる。滞在期間中、英語の接触時間を1日ごとに記録するよう指示した訳ではないので、自己申告によって分けられたグループがかならずしも同条件でくられた群ではなかった可能性が考えられる。又、②1日平均の接触量がある一定量以上（例えば4時間以上）で一定期間（例

えば26日間) すごした場合、研修前と後では被験者全体で「聴解」や「読解」技能に有意な差がおりうるが、1日4時間以上で26日間という条件下では、接触時間数で分けられたグループ間に有意性が認められるほどの差にはならなかった、との可能性も否定できない。さらに別の要因が複合的に働いた可能性も捨て切れないが、いずれにせよ、この点に関しては要因を特定することができなかったが、調査方法を再検討し今後の課題としたい。

4-4 項目間の相関

4領域間の相関係数を事前・事後について計算し、まとめたものが表9、10である。事前テストでは「聴解」と他の3領域との相関が比較的高い。ちなみに相関係数が最も高かったのは「聴解」×「構造」の0.45815 ($P<0.01$) であった。

表9 テスト項目間の相関係数表(研修前)

	聴解	構造	語彙	読解
聴解	1	0.45815**	0.43750**	0.41239**
構造		1	0.14233	0.35246**
語彙			1	0.31382*
読解				1

** $P<0.01$ * $P<0.05$

表10 テスト項目間の相関係数表(研修後)

	聴解	構造	語彙	読解
聴解	1	0.57982**	0.42808**	0.67237**
構造		1	0.32553*	0.66443**
語彙			1	0.47844**
読解				1

** $P<0.01$ * $P<0.05$

事後テストでの領域間の相関は「聴解」×「語彙」の係数が事前の0.43750 ($P<0.01$) から0.42808 ($P<0.01$) へと若干減少したものの、それ以外、相関係数がすべてに上昇した。特に著しい上昇を示したのは「読解」と他の3領域との相関であった。

最も相関が高かったのは「聴解」×「読解」の0.67237 ($P<0.01$) であった。これは、前述の事前・事後での「聴解」、「読解」の平均点の伸びともあわせて、「聴解」と「読解」との間には、両領域間で共有する要素の部分が、他の領域間で共有するそれよりも大きいことを示唆しているものと思われる。

5. 結論

- 1) 26日間の米国ホームステイ・語学研修後、被験者の英語能力は「聴解」と「読解」の2領域で有意差 ($P<0.01$) が認められ、研修の効果が確認された。

- 2) 「読解」に関しては、研修中特別な訓練がなされなかったにもかかわらず有意な伸びを示した訳で、これは「聴解」からの転移によるものと推察される。
- 3) 記名式アンケートから、被験者を研修中の英語接触量別にグループ分けし、8時間以上、6～8時間、4～6時間の3グループ間で、研修後英語能力に差が生じるかを検証したところ、3グループ間に有意な差は認められなかった。
- 4) 事前・事後の各テスト領域間の相関を測定したところ、事後テストの「聴解」と「読解」との相関が0.67237 ($p < 0.01$) と最も高かった。これは、事後テストにおける両領域の平均点が共に有意な伸びを示したことから合せて、「聴解」と「読解」の2領域間には、両領域間で共有する要素の部分が他の領域間で共有するそれよりも、大きいことを示唆しているものと思われる。

<注>

- 1) 本稿では「英語能力」を「聴解」、「構造」、「語彙」、「読解」の領域に分けて測定したが、このようないわゆる 'Partial divisibility hypothesis' に立脚するならば、当然「話す」能力の測定もなされてしかるべきである。しかしながら、「話す」能力の測定に関しては妥当性、信頼性にすぐれ、かつ実用性の高いテストの開発が進んでいないために、本研究では「話す」領域についての測定を行わなかった。
- 2) 清瀬 健「海外語学研修とLL授業授業にみる英語能力の変化」北星学園女子短期大学紀要 第24号
- 3) ここでは、「英語による言語活動をしている時間」。すなわち、「英語を使用し他人と意志の疎通をしている時、他人が話すのを聴いている時、テレビを見たりラジオを聴いたりしている時」等をさす。

参考文献

- 大友賢二 (1981), 「英語能力の構造」『英語教育』大修館, 11月号
- Porter, D (1976), "Modified Cloze Procedure as a Teaching Technique" *English Language Teaching* 32 (3)
- Reeds, J. A., H. Wintitz and P. Garcia (1977) "A Test of Reading Following Comprehension Training" *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching* (Vol. 15 No 4)
- 佐藤史朗 (1988), 『クローズテストと英語教育』南雲堂

<資料>

*アメリカ語学研修アンケート

(アンケートは帰国後2週間目を実施され、1年生59名から回答を得た。)

このアンケートは記名式ですが、ここから得られるデータは調査のみに使用され、科目の成績や、その他の評価に影響が及ぶことはありません。

回答はマークカードに記入して貰いますが、選択肢のうち「その他」を選んだ人は、マークカードの「その他」にまず印をし、さらにこの用紙に直接自分の答えを書いてください。

1. アメリカ語学研修に参加しようと決めた時期はいつですか

a.北星短大に入学する前から参加したいと思っていた	45人 (76.3%)
b.入学前には考えていなかった	14 (23.7%)
2. 研修期間は

a.長すぎる	0人 (0 %)
b.ちょうどよい	38 (64.4%)
c.短すぎる	21 (35.6%)
3. 出発前のオリエンテーションで、ホームステイに関する情報(ホストファミリーの名前、家族構成、年齢に関することはここには含まれません)が

a.十分に得られた	4人 (6.8%)
b.まあ得られた	24 (40.7%)
c.あまり得られなかった	18 (30.5%)
d.ほとんど得られなかった	13 (22.0%)

アメリカでの英語の授業に関して(4-8)

4. 授業のレベルは

a.低すぎる	14人 (23.7%)
b.ちょうどよい	27 (45.8%)
c.高すぎる	18 (30.5%)
5. 教師の教え方は

a.良かった	30人 (50.8%)
b.ふつう	22 (37.3%)
c.悪かった	7 (11.9%)
6. 教師(アシスタントを含む)の人柄

a.親しみがもてる	44人 (74.6%)
b.ふつう	10 (16.9%)
c.親しみがもてない	5 (8.5%)

短期海外ホームスティ・語学研修が及ぼす英語能力への影響

7. 授業中、英語を使用する機会が

a.十分に与えられた	13人 (22.1%)
b.まあ与えられた	35 (59.3%)
c.あまり与えられなかった	10 (16.9%)
d.ほとんど与えられなかった	1 (1.7%)
8. 授業全般について

a.非常に良かった	4人 (6.8%)
b.まあ良かった	19 (32.2%)
c.普通	16 (27.1%)
d.ちょっとがっかりした	18 (30.5%)
e.非常にがっかりした	2 (3.4%)
9. ホームスティをしはじめ（最初の1週間くらい）で、英語でのコミュニケーションにどれだけの障害がありましたか

a.全然こまらなかった	2人 (3.4%)
b.あまり困らなかった	22 (37.3%)
c.少し困った	31 (52.2%)
d.非常に困った	4 (6.8%)
10. ホームスティの終わりごろ（最後の1週間くらい）、英語でのコミュニケーションにどれだけ障害がありましたか

a.全然こまらなかった	5人 (8.5%)
b.あまり困らなかった	40 (67.8%)
c.少し困った	14 (23.7%)
d.非常に困った	0 (0%)
11. アメリカ滞在中、英語を話したり聴いたりした時間（テレビを見る時間を含む）は1日平均どのくらいだと思いますか

a.8時間以上	19人 (32.2%)
b.6～8時間	27 (45.8%)
c.4～6時間	13 (22.0%)
d.2～4時間	0 (0%)
e.2時間以下	0 (0%)
12. あなたは出発前、アメリカで自分の英語力を向上させたいとおもっていましたか

a.強くそう思っていた	42人 (71.2%)
b.まあそう思っていた	14 (23.7%)
c.とくに思わなかった	3 (5.1%)
d.ぜんぜん思わなかった	0 (0%)
13. 自分の英語能力はアメリカ研修後のびたと思いますか

a.そう思う	37人 (62.7%)
--------	-------------

- b. 思わない 21 (35.6%)
 無回答 1 (1.7%)
14. 13で「思う」と答えた人のみ。どの領域がのびたと思いますか(複数回答可)
- a. スピーキング 1人/37名中 (2.7%)
 b. リスニング 24人 (64.9%)
 c. 文法 1 (2.7%)
 d. 語彙 2 (5.4%)
 e. 読解 0 (0 %)
- 2人でホームスティした人のみ答えてください(15-16)
15. 2人でホームスティすると決まったときどう思いましたか
- a. 2人でよかった 4人/16名中 (25.0%)
 b. 特にどうとは思わなかった 1人 (6.3%)
 c. 1人の方がよかった 11 (68.7%)
16. 2人でホームスティしおえてどう思いましたか
- a. やっぱり1人の方が良かったとおもっている 7人/16名中 (43.8%)
 b. 特にどうとは思わない 0人 (0 %)
 c. 2人で良かったと思っている 9 (56.2%)
- 1人でホームスティした人のみ答えてください(17-18)
17. 1人でホームスティすると決まったときどう思いましたか
- a. 1人でよかった 32人/43名中 (74.4%)
 b. 特にどうとは思わなかった 8人 (18.6%)
 c. 2人の方がいいと思った 3 (7.0%)
18. 1人でホームスティしおえてどう思いましたか
- a. やっぱり1人の方が良かったとおもっている 35人/43名中 (81.4%)
 b. 特にどうとは思わない 4人 (9.3%)
 c. 2人の方が良かったと思っている 4 (9.3%)
19. アメリカ研修に参加して、なんらかの気持ちの変化がありましたか
- a. あった 55人 (93.2%)
 b. ない 3 (5.1%)
 無回答 1 (1.7%)
20. あったと答えた人のみ。どういう点で(複数回答可)
- a. 今までより何事にも積極的に取組もうとおもった 7人/58名中 (12.1%)
 b. 英語力を高めたいと思う気持ちがいままで以上に強くなった 21 (36.2%)
 c. アメリカの大学に編入したいと思うようになった 1 (1.7%)
 d. 日本の文化について学ばなければならないと思った 2 (3.4%)

短期海外ホームステイ・語学研究が及ぼす英語能力への影響

- e.その他 () 0 (0.0%)
21. ホームステイ中、あなたは今まで以上により積極的に行動したと思いますか
- a.強くそう思う 6人 (10.2%)
- b.まあそう思う 38 (64.4%)
- c.変わらない 13 (22.0%)
- d.あまりしなかった 1 (1.7%)
- e.ぜんぜんしなかった 1 (1.7%)
22. ホストファミリーとの人間関係について
- a.最初からうまくいった 36人 (61.0%)
- b.最初はしっくりいかなかったが最後の方はうまくいった 17 (28.8%)
- c.特にどうということはない 5 (8.5%)
- d.最初はうまくいっていたが段々わるくなってきた 0 (0.0%)
- e.最初から最後までうまくいかなかった 1 (1.7%)
23. ホストファミリーとの今後の交流について (複数回答可)
- a.サッポロに招待することを考えている (自分の家を含む) 2人 (3.4%)
- b.文通は続けるつもりだ 16 (27.1%)
- c.ホストファミリーの家に再度行くつもりだ 7 (11.9%)
- d.もう交流はないと思う 6 (10.2%)
- e.その他 () 1 (1.7%)
24. 自分がホームステイをしたホストファミリーに対して
- a.非常にまんざくしている 37人 (62.7%)
- b.まあ満足している 16 (27.1%)
- c.特にどうとは思わない 2 (3.4%)
- d.あまり満足していない 3 (5.1%)
- e.非常に不満足 0 (0.0%)
25. もう一度アメリカ研修に参加するとした
- a.同じ様なホームステイをしたい 32人 (54.2%)
- b.大学の寮のようなところがいい 7 (11.9%)
- c.寮とホームステイを両方経験したい 19人 (32.2%)
- d.その他 () 0 (0.0%)
- 無回答 1 (1.7%)

An Overseas Home-stay Language Study Tour: How It Affects English Proficiency

Ken Kiyose

Abstract

This paper reports the effects of a twenty six days overseas home-stay language study tour on the subjects' proficiency in English.

Tests were administered before and after the tour to measure the differences between the pre- and post-tests in the areas of *listening* (fifty items), *structure* (seventy five items), *vocabulary* (seventy five items) and *reading* (fifty items). T test scores showed significant differences ($p < 0.01$) in listening and reading. Despite the fact that the subjects hardly received any reading lessons or engaged in the activities thereof while in the U.S., the progress in reading was significant, presumably due to "transfer" from listening.

The subjects were divided into three groups in accordance with the amount of exposure to English during the stay, to examine the difference in the improvement in the four areas. No significant differences were shown among the groups in any of the four areas.

Correlations among four areas were calculated in the pre- and post-tests. The highest was between listening and reading: 0.67237 ($p < 0.01$) obtained in the post-test. Along with the significant improvement in listening and reading, this might imply that the portion of elements, of which linguistic competence is believed to be composed, shared by listening and reading, is larger than that shared by other area combinations.